会報
# 札響くらぶ
2021年 5月 第93号
編集・発行／札響くらぶ 〒064-0931 札幌市中央区中島公園 1-15 札響事務局気付
ホームページ http://sakkyoclub.net/sakkyoclub/

## 札響くらぶの25年 ― まちづくりへの道 ―

「札響くらぶ」が創設されて25年が経過する。黎明期の写真を見ると、さすがに25年の年月の経過は残酷で、面影を追うことに苦労することも多い。だがこの間の「くらぶ」の実践は多くの会員にとって「ずっしりとした財産を形成した充実感と共に、楽しかった」と概ね総括することができると、そう私は思います。

### 「札響くらぶ」創設と活動の原点

有名どころの楽団の演奏会のチケットは完売、でも地元の札響の演奏会には何故か隙間風が吹いていることが、キタラ開設一年前の現状でした。札響が市民にとって我が町のオーケストラだと親しみと愛着を持たれるようなオケになる必要がある。楽員の皆さん方が音楽創りに懸命な努力をされると同時に、聴衆に対しても積極的に接する機会を増やすこと。そこで、札響の魅力を発信し、楽団・楽員と市民をつなぐ役割を果たす活動が必要と考え、「札響くらぶ」立ち上げに参加しました。１９９６年８月のことです。会則では「くらぶ」の目的を「札響の演奏を楽しみ札響の活動を支援、もって音楽文化の発展に寄与する」と謳いあげました。これが誇り高い「札響くらぶ」の出発点であり、活動の原点です。

### 具体的活動実績

楽員の方々には「札響くらぶ」は「ファンクラブ」ではなく、「札響ファンを増やすくらぶ」であることの理解を求め、様々な市民聴衆との接近を図る活動への参加を求めてきました。会報のプレイヤーズトークはじめ、現在まで30回を数えている「札響くらぶサロン」に個々の楽員が登場し開催するミニコンサートでの会員・市民との交流は、楽員と聴衆との距離を近づけることに役だつ活動です。

「札響くらぶ」の黎明期、「札響くらぶコンサート」（札響と遊ぼう）は親子を含む子どもをターゲットにしたコンサートの実践です。９年間に渡り継続開催したことは、今日の「札響くらぶ」の基礎を形作ったともいえます。会員が汗を流して企画し、チケットを自ら売りさばくという負担とリスクを背負いながら、聴衆拡大を図る活動。会員の結束と楽団・楽員からも信頼を得る財産となりました。ここでの「子ども達に札響を聴いてもらいたい」との願いは、その後札幌市に採用され、小学６年生全員が参加する「キタラファースト・コンサート」事業が開始され、今日まで25万人の子ども達がキタラで札響の音楽を聴く機会が保障されてきました。この事業が順調に軌道に乗り、「札響くらぶコンサート」は役割を終えました。今は、市内の吹奏楽部で活躍する中学生を招待する事業（キタラセカンド・コンサート）に取組んでいるのです。

札響が毎年購入する楽譜代の一部を、「札響くらぶ」が寄付をするという活動もユニークです。目的を「見える化」した寄付（寄付は参加すること）は、この10年間途絶えることなく継続出来ています。

1999.4.17 第1回札響くらぶコンサート後の懇親会

### 「札響くらぶ」のこれから

私たち「札響くらぶ」の活動原点は「札響の音楽を愛し、札響が存分に活動できるまちづくり」であることを確認したい。札響の存在が輝き、音楽をはじめとする多様な芸術文化が花咲く札幌・北海道であることが、この町に住む市民の誇り（civic pride）に思える、そしてそんなまちづくりに参加できることが誇りの根拠になる活動を、「札響くらぶ」は目指してゆきたいものだと、私はそう思うのです。

その意味で「札響くらぶ」の活動は、楽団及び演奏家たる楽員と聴衆を繋ぎ繋げる役割を明確に意識し、市民（特に子ども達）との接触の場を広げる活動をより意識的に展開したいものです。これからも様々な活動を共にして「札響と遊ぼう！」そう呼びかけたいと思います。

札響くらぶ会長
上田文雄

6月～8月 新・定期 定期 名曲

# 演奏会を楽しく聴くために

八木幸三（札響くらぶ顧問）

新・定期演奏会 第6回
6月4日（金）19：00
コンサートマスターと
ヴァイオリン独奏
フォルクハルト・シュトイデ
ピアノ 三輪郁

三輪郁

## ■ジョン・ウィリアムズ「シンドラーのリスト」より ヴァイオリンとオーケストラのための3つの小品

映画音楽の巨匠ジョン・ウィリアムズは、ルーカスやスピルバーグの大ヒット作品の音楽を担当したことで有名だが、交響曲や協奏曲も手がけ、ボストン・ポップスオーケストラの指揮者も長らく務めた。近年、ウィーン・フィルと自作曲を指揮したTVをご覧になった方も多いことだろう。米アカデミー賞7部門を受賞した映画「シンドラーのリスト」は作曲賞も受賞し、ヴァイオリン独奏は名匠パールマンが演奏した。ホロコーストの悲劇と多くのユダヤ人を救った勇敢なドイツ人の物語が、この美しい音楽によって叙情豊かに語られる。

フォルクハルト・シュトイデ

## ■メンデルスゾーン ヴァイオリンとピアノのための二重協奏曲

この曲は1823年に作曲され、伴奏は弦楽合奏であるが、管弦楽版も存在している。演奏される機会が少ないため、知名度も低い作品だが、近年では録音がいくつか出ており、演奏動画を見ることもできる。1960年に初めて出版された。作曲の経緯については不明な点が多く、異なる2つの独奏楽器が伴う唯一の協奏曲である。メンデルスゾーンの自宅でのサロン・コンサートで演奏するために作曲された作品で、友人でヴァイオリニストのエドゥアルト・リーツのヴァイオリンと、メンデルスゾーンか姉ファニーのピアノ（またはクラヴィーア）独奏を想定して書かれたと思われる。第1楽章の2つの独奏楽器の扇情的な掛け合いと管弦楽の躍動的なフレーズ感が聴き所。

## ■メンデルスゾーン 交響曲第4番「イタリア」

ワーグナーは、メンデルスゾーンを「音による第一級の風景画家」と評した。それは、メンデルスゾーンがスコットランドを訪れた時に書いた「フィンガルの洞窟」や交響曲第3番が、その地域の神秘的でほの暗い雰囲気を見事に音化させていたからだろう。そして、翌年に訪れたイタリア旅行では、この国の溌剌とした明朗な印象を交響曲第4番の楽想にしっかりと込めている。とりわけ第4楽章のサルタレロのリズムが聴き手の心を浮き立たせてくれる。

第638回定期演奏会
6月19日（土）17：00
20日（日）13：00
指揮 川瀬賢太郎
ピアノ 藤田真央
メゾソプラノ 福原寿美枝

川瀬賢太郎

©Yoshinari Kurosawa

## ■シューマン ピアノ協奏曲

シューマンはメンデルスゾーンのピアノ協奏曲を聴いて、協奏曲への意欲が湧き、幻想曲に2つの楽章を加えて彼の唯一の協奏曲を完成させた。技巧的な協奏曲を避けていたシューマンだったが、結局完成された作品は巨匠的技巧がなければ演奏できない作品となり、作曲者特有のピアニズムは、この作品でさらに複雑化され、色彩化されている。今、TVでも大人気の俊英、21歳の藤田真央がこの曲からどんなピアニズムを聴かせてくれるのか大注目だ。

藤田真央 ©Eiichi Ikeda

福原寿美枝

## ■マーラー 交響曲第4番

マーラーの交響曲の中で2番、3番とともに、この曲は三部作としてとらえられている。その中で外見的には軽量なのだが、他の2作品同様、楽章の中に声楽が含まれ、それが重要な役割を担ってマーラーの音楽的特徴を際立たせている。そして3曲とも、永久的な宗教的信念、あるいは人間の生き方についての真摯な考えが反映されている。それは三部作の縦糸となる「子どもの魔法の角笛」と密接に関係しているからだろう。4楽章でソプラノが天国の喜びを歌う部分で、作曲者の心情をじっくり味わっていただきたい。

第639回定期演奏会
7月10日（土）17：00
11日（日）13：00
指揮　尾高　忠明
ピアノ　小曽根　真

■ラフマニノフ
ピアノ協奏曲第2番

ラフマニノフは、幼少期に豊かな森と美しい湖のあるノヴゴロドで過ごし、そこで夜ごと教会の鐘の響きで感性をふくらませたと言う。彼の作品の中でも最も有名なこの曲は第1楽章の冒頭で、重い鐘の和音がピアノにより奏でられ、哀愁に満ちた濃厚な旋律がとうとうと流れ出す。純愛映画の背景にぴったりの甘い名旋律を聴くと、若かりし日の青春のときめきが蘇ってくるようだ。

尾高忠明

小曽根　真　ⓒ久富健太郎

■シベリウス
「ペレアスとメリザンド」組曲

メーテルリンクの戯曲「ペレアスとメリザンド」は多くの作曲家が、オペラや劇付随音楽として作曲していた。若い頃から劇音楽に強い関心を持つシベリウスは、第2の創作期にあたる頃、ヤルヴェンパーの田園生活の中で、この戯曲の劇音楽を作曲する。交響曲第2番やヴァイオリン協奏曲など名曲を次々に生みだした後の作品だけに、この組曲は巧みなオーケストレーションにより、物語の情景が精緻に描き出された作品と言える。

■チャイコフスキー
幻想序曲
「ロメオとジュリエット」

チャイコフスキーは、美しきプリマドンナ、デジレーと恋に陥ったが、それは成就しなかった。バラギエフは、シェークスピアのこの名作を作曲するようにチャイコフスキーにすすめた時、彼の恋の痛手が作曲することをためらわせたと言う。結局、初演は不評でその後改作につぐ改作で10年後に決定稿ができあがった。曲は劇的な曲想を持ち、「標題的な内容を持つ音詩風の演奏会用序曲」という意味で「幻想序曲」という題名がつけられている。

森の響フレンド
名曲コンサート
8月21日（土）14：00
指揮　円光寺雅彦
ヴァイオリン　松田理奈

■ビゼー
歌劇「カルメン」
第1幕への前奏曲

■サラサーテ
カルメン幻想曲

ご存じ魔性の女カルメンと彼女を愛しすぎてしまったドン・ホセの悲劇を描いたこのオペラは、作曲過程でその内容から劇場側とトラブルが続出したと言う。しかし、型破りで画期的なこの作品は、その迫真のリアリズムが後のヴェリズモ・オペラに強い影響を与え、不滅の名作となった。まずは、この歌劇の「第1幕への前奏曲」で胸を高鳴らせて欲しい。そして、ヴァイオリンの名手サラサーテらしく管弦楽を背景に独奏ヴァイオリンが超絶技巧を繰り広げるパラフレーズ作品「カルメン幻想曲」をお聴き頂く。重音奏法、グリッサンド、フラジオレット、ピッツィカートなどなどヴァイオリンの様々な技巧がいたるところで楽しめる。

円光寺雅彦

松田理奈

■バルトーク
ルーマニア民俗舞曲

この作品はルーマニア民族の精気な生命力がほとばしる楽想を持つ楽しい音楽だ。バルトークはハンガリー民謡を採譜し自分の作品に多く採り入れているが、採譜当時ハンガリー領であったトランシルヴァニアの山地に住むルーマニア人の民族音楽を用いてこの曲はつくられた。

■リスト
ハンガリー狂詩曲第2番

■ブラームス
ハンガリー舞曲

リストは、シューマン、ブラームス、ワーグナーなど当時の名だたる音楽家と深い関わりを持ち、彼らの管弦楽作品をピアノ版に編曲するなど、ロマン派音楽における重要な位置にあった。彼は、ピアノの名手であり多くのピアノ作品を残しているが、「ハンガリー狂詩曲」は20曲にのぼる作品集。管弦楽化された6曲の中で、この第2番も前半はゆったりと重々しく、後半は急速で情熱的なジプシー音楽（ロマ民族音楽）のチャルダーシュ（ハンガリーの舞曲の一種）の形式で書かれている。同様にブラームスもジプシー音楽に魅了され、21曲のピアノ連弾曲を書いた。それらも管弦楽化されたが、その中から4曲を聴いていただく。

■J・シュトラウスⅡ
「ジプシー男爵」序曲
「騎士パズマン」
～チャールダーシュ

「オペレッタ王」とも呼ばれるJ・シュトラウスⅡは、「こうもり」の大ヒットの後、ハンガリー人シュニッツァーの台本をもとに2年の歳月をかけ作曲したのが、オペレッタ「ジプシー男爵」だ。この作品も初演は大成功し、作曲者の代表作となった。劇中の旋律を巧みにつらね合わせた序曲は実に楽しい。彼の唯一のオペラ「騎士パズマン」は、台本が稚拙だったためか、一連のオペレッタに比べ、評判はあまり良くなかった。しかし、第3幕で演奏されるチャールダーシュは傑作と評価され、今日でも演奏機会は多い。

＊出演者並びに演奏曲目については変更となる可能性があります。

（写真協力　札幌交響楽団）

楽員さんに興味津津 ㉕

# ヴァイオリン奏者 赤間さゆらさんに聞く

## 感情を細やかに表現できる魅力

### ♪ ペットショップの店員だったかも？

生まれは旭川です。中学までは地元の学校に通いましたが、高校は東京藝術大学の附属高校に進みました。子供の頃はとても神経質な性格だったと当時の先生や両親から聞いています。今ではだいぶ図太くなってしまいましたが…。

ヴァイオリンは４歳から始めました。両親が音楽好きだったので、私に早くからヴァイオリンを習わせたかったようです。自分から始めたいと言った記憶はないのですが、今となっては早くから習わせてもらえて感謝しています。

小中学校時代は週末に旭川から札幌へレッスンに通っていたので、学校の部活動には所属できませんでした。ずっと帰宅部だったので、今でも部活動には憧れがあります。全く得意ではないのですが運動部に所属してみたかったです。やっていれば大人になった今、少しは得意になれていたかな？

4歳の頃

音楽以外の進路を考えたことはなくて、昔から漠然と音楽の仕事に携わりたいなと思っていました。それでも、小学校の卒業文集には、動物が好きなのでペットショップの店員になりたいと書いてありました。今でも動物は大好きです。

大学時代は一般教養の授業、毎週ヴァイオリンのレッスン、室内楽の授業などがあって、ごく普通の学生生活を送っていました。後半は演奏のアルバイトを始めたり、自由な時間も増えたり、できることの選択肢が増えたのでとても楽しく有意義に過ごせました。

### ♪ オケピは響きも景色も新鮮！

札響のことは幼いころから知っていました。小学校の時、Kitaraに札響の演奏会を聴きに行った覚えがあります。

高校生の頃から当時札響の首席奏者だった大森潤子先生に師事していました。レッスンは、先生が東京の方にいらっしゃった時に見ていただいていました。また、私が長期休みで実家に帰省した時、札幌で見ていただいた事もありました。その影響もあって、札響のオーディションがあると知った時は迷わず受けることに決めました。大学を卒業してすぐのことで、初めてのオーディションでしたので、とても緊張しました。６ヶ月の試用期間を経て、２０１８年９月に正式に入団しました。

入団してから、札響は札幌近郊ばかりでなく、道内各地に行って演奏していることを知りました。その際の移動も楽員さんが自分で行なっていることにも驚きました。はたから見たら優雅な仕事と思われるかもしれませんが、実は体力勝負の仕事なんだなと実感しています。

札響に入団するまではオーケストラピットに入ったことがなかったのですが、hitaruができてバレエやオペラをやるようになって初めて入りました。普段のコンサートとは響きも景色も全く別物なのが新鮮で、とても楽しく毎回わくわくしています。

以前から室内楽にもとても興味がありました。今もお話をいただいた時には二つ返事でお引き受けしています。大学時代には同級生のメンバーと数年間カルテットを組んでいて、更にアンサンブルが好きになりました。その時のすばらしい経験がオーケストラ入団を目指すきっかけになったと思っています。

### プロフィール

旭川市生まれ。東京藝術大学附属音楽高等学校を経て、東京藝術大学を卒業。その後、桐朋学園オーケストラアカデミーに在籍、修了。2011 年、旭川新人音楽会オーディションにて旭川市新人音楽賞受賞。同年、第 21 回日本クラシック音楽コンクール全国大会入選。2017 年、第 23 回おきでんシュガーホール新人演奏会オーディションにてグランプリ受賞。その他、各賞を受賞。これまでにヴァイオリンを中川正子、片山淑子、大森潤子、清水高師の各氏に師事。2018 年 9 月に札幌交響楽団に入団。

大学を卒業して1年後、講習会が行われたフランスのお城の庭で

## ♪ コロナ禍で改めて痛感したこと

オーケストラの練習がない日は、自宅で平均2～3時間くらい練習しています。コロナで自粛期間になった時は、それまではあまりやってこなかった自炊を少しずつ始めました。今でも得意ではないのですが、前よりは料理のレパートリーが増えてきました。もっと手際よく料理ができるようになりたいなと思っています。仕事以外の時間は動画や映画を観ています。コロナ自粛期間に様々なサブスクリプションに登録したので色々なジャンルの動画を見ることができて楽しいです。

コロナ禍の中で長い間お客様に生の演奏をお届けできないつらさ、もどかしさは、思っていた以上に苦しいものがありました。自粛期間が明けた時、初めてお客様に来ていただいたコンサートは一番心に残っています。お客様がいてくださるという、それまで当たり前に感じていたことのありがたみを改めて痛感したコンサートでした。

2019年11月17日「札響くらぶ」サロンコンサート

## ♪ 音楽が持っている癒しの力を

「札響くらぶ」にはいつもたくさんのご支援をいただいて、とても感謝しております。以前、「札響くらぶ」のサロンコンサートに出演させていただいた時には、多くの会員の方と初めて交流することができて、とても楽しかったです。会報もいつも興味深い話題が掲載されているので、毎回楽しく読ませていただいています。

北海道は身近に自然がたくさん残っているのでとても気に入っています。本州から友達が遊びに来たりすると、みんな口を揃えて「ヨーロッパみたい！」「美味しいものがたくさんあって住みたい！」と言ってくれるのが嬉しいです。

ヴァイオリンは、華やかさの中に繊細さもあり、感情を細やかに表現できる魅力的な楽器だと思います。先の見えない不安というものが身近となってしまった今の時代ですが、だからこそ音楽の持っている癒しの力やパワーを改めて感じています。

日頃ご支援してくださっているたくさんの方に少しでもそういったものをお伝えできるよう、また、恩返しできるようにより一層頑張っていきたいと思っています。

友人と羊ケ丘展望台で

## 赤間さゆらさん
# 北海道農民管弦楽団と共演

札響ヴァイオリン奏者の赤間さゆらさんが、アマチュアオーケストラでプロコフィエフのヴァイオリン協奏曲第2番を独奏されると聞き、1月31日（日）真冬の旭川へ足を運びました。会場の旭川市文化会館へ札幌から高速バスで向かいましたが、途中吹雪で高速道路から降ろされ、会場では新型コロナ感染症対策の検温に手間取り、やっとの思いで席に着きました。

赤間さんが共演した北海道農民管弦楽団は道内の農業従事者によるオーケストラで、毎年農閑期に道内各地で定期演奏会を行なっています。今年の第27回定期演奏会は旭川で開催され、地元の旭川市少年少女オーケストラも賛助出演しました。旭川出身の赤間さんにとっては故郷の少年少女の皆さんとの共演でもありました。指揮は楽団代表の牧野時夫さんが振りました。

プロコフィエフのヴァイオリン協奏曲第2番は独奏ヴァイオリンもオーケストラも技術的に大変難しい協奏曲です。赤間さんはこの曲を充分知り尽くされていて、オーケストラのパートが安定を欠いても、赤間さんのヴァイオリンは乱れることなく輝かしい音色をホールいっぱいに響かせ、特に第2楽章はとても美しく見事な演奏でした。赤間さんとしてはもっと表現したいことがあったのではないかと思いますが、アマチュアオーケストラをバックにかなりの腕前であると感じました。

メインのチャイコフスキーの交響曲第5番では、赤間さんは第1ヴァイオリンの後方でエキストラとして一緒に演奏されました。農民オケらしい土の匂いを感じさせる力演で会場を沸かせ、プロとかアマとか世代といった垣根を超え、ほのぼのとした心温まる演奏会でした。

札響の楽員の方々は、オーケストラプレイヤーから離れていろいろな形の音楽活動に携わっています。リサイタルや仲間内でアンサンブルを結成しての演奏活動、また演奏指導や音楽教育の分野でご活躍されている方もおられます。

なかには赤間さんのように、市民のオーケストラや吹奏楽団などアマチュア演奏家の中に入って、エキストラやソリスト、指揮者として演奏活動されている方もいて、プロの演奏家と共に音楽を創り上げる過程は市民にとって大きな刺激になっています。この刺激が新たな創造を育み、芸術文化のみならず、地域産業の発展のための糧となることを期待しています。

会員／高木誠一

賛助出演の少年から花束を受け取る赤間さん

# 指揮者・ソリストを招聘するには

**札響に招かれる指揮者やソリストは誰がどの様に決めるのだろうか」という疑問は、我々会員の間ではよく話題になります。そこで、「招聘する指揮者とソリストの決め方」について、事業部長の宮下良介さんにお尋ねし、原稿を寄せていただきました。**

いただきましたお題につきまして、事務局長、首席指揮者バーメルトと共に決めていることではありますが、私が担当する上で大切にしていることなどをおこたえいたします。

まず第一に札響で良い演奏になるか、お客様に喜んでいただけるかを考え、そこにお客様や楽団員から日頃お聞きしている意見や予算を考慮して決めています。そのためにも、様々なアーティストの情報を、世界中の信頼する耳の持ち主から聞くことは重要です。近年、アーティストの売り込みは文字のプロフィールだけでなく音資料、映像資料と一緒の場合がほとんどですので、確認が楽になりました。特に指揮者は、どう指揮しているか映像でみることができるので助かります。他の楽団と成功したたからと言って札響とうまくいくとも限らず、またその逆もあります。大変高名な方に来ていただければ必ず名演ともいかないのですから、本当に演奏は水物（みずもの）です。また、実際にお越しいただいたアーティストとの演奏についても、お客様、楽団員の中で評価が割れ、また招聘すべきかどうかの判断に苦しむことがよくあります。こうしたとき、若いアーティストには寛容でありたいと思います。

若いアーティストの場合、将来性も見て起用していく必要があります。たとえ一度の出会いが名演でなかったとしても、そこに「なにか」なかったかを考えることが大事だと思うのです。

毎年毎回、もっと良い人選、選曲が出来たのではと思いかえすことがしばしばです。反省すべきところは反省し、色々な方々の意見を聞いて、これからもみなさまと札響、アーティストとのより良い出会いを作っていきたいと考えています。

**札幌交響楽団　事業部長**
**宮下良介**

# 札響くらぶ交流会での出来事　そして　パーソネル・マネージャー

私が楽員のオーボエ奏者から事務所付きのパーソネル・マネージャーになって間もなく丸10年が経ちます。

これからお話しするのは、それよりも更に7～8年前のある出来事なので、かなり昔のことになりますが、その当時を覚えておられる方もきっといらっしゃるかと思います。

ある時、札響くらぶと楽員との交流会の席に呼ばれ、何かスピーチをして欲しいと頼まれたことがありました。テーマはお任せとのことで、何を話したらよいか悩んだ末にひらめいたのが、人前で演奏する際に多くの人の身に降り掛かる「あがる」という問題でした。

元々私もあがり症を自認していたので、自分の心の奥底を吐露したり、失敗談や対応策を披露できれば意外に面白いのではないかと思い、結構自信を持ってマイクに向かい話し始めたまでは良かったのですが、特に原稿を用意していなかったこともあり、話をしているうちに、段々と何を話せば良いのか、自分でも訳が分からなくなってきてしまいました。

その内とうとう言葉を進めることが出来なくなり、突然「申し訳ありません。あがってしまいこれ以上話すことが出来ません。途中ですがこれで終わります！」と頭を下げてマイクから離れ、なんとスピーチを頓挫しなければならない事態となってしまったのです。

自ら選んだ「あがる」という壮大なテーマに逆に食われてしまい、皆さんの前で茫然と立ち尽くす自分の姿に、恥ずかしさの余り、何処か穴があったら入りたいという切実な気持ちを、今でも思い出す程の、誠に残念な結末となりました。あの時は皆様には本当に失礼をいたしました。

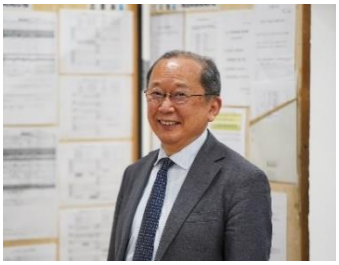
さて私の現在の役目であるパーソネル・マネージャーとは、英語の「personnel」の意味から「部隊を取り仕切る係」となります。実際には楽員やエキストラ奏者など演奏に関わる人達の世話役です。

毎回の演奏会に出演するメンバーが誰になるのか、各セクションからの情報をまとめて出番表として貼り出しをしたり、指揮者には出演者の座席配置図を用意します。遠方からみえるエキストラさんの飛行機と宿泊のお世話や、指揮者用に水分補給の準備も欠かせません。

練習時に指揮者やソリストをオケのメンバーに紹介する大切な役目もあるのですが、実はこれが私が最も不得意とする分野で、まだまだ改善の余地が残されています。また最近は、仕事が始まる前に行う全員の体温測定も新しい日課に加わりました。

音を出す楽員達が無事に演奏業務を遂行出来るような仕組みや環境を整える。それがパーソネル・マネージャーの役割りであり、演奏会を成立させる影の仕事の内のひとつという訳です。そんな役回りもそろそろ誰かにバトンを渡すタイミングが近づいているのではと思う昨今です。

**札幌交響楽団**
**パーソネル・マネージャー**
**高井　明**



高井明さん：楽団員連絡掲示板の前で

（写真協力：札幌交響楽団）

# 指揮者としての高井明さん

指揮者としての高井明さんの姿を初めて見た。5月4日（火・祝）の「札幌フィル・第62回定期演奏会」。これまでにも高井さんはこの市民のアマオケを何度も振っているらしい。

高井さんの指揮は明解であった。少し大きめの振りで、的確に指示を奏者に送っていた。我々聞き手にも曖昧さのない、歯切れのよい音が聞こえてきた。

今回の曲目はウェーバー「魔弾の射手」序曲、モーツァルト「交響曲第40番」、エルガー「エニグマ変奏曲」。選曲の意図や事情は分からないが、私は「ト短調交響曲」がメインだったと勝手に決めている。第3楽章のトリオ、木管のからみとホルンが心地よく耳に残っている。

高井さんの雄弁な両手と札幌フィルのレベルの高さが強く印象に残る演奏会であった。

**会員／村山英朗**

## 私の心の故郷　札幌交響楽団

札響の第1回定期演奏会を聴いたのは昭和36年、旧札幌市民会館でした。昭和2年に建てられた「札幌市公会堂」は昭和24年「札幌市民会館」となりました。その後、昭和33年に新しい市民会館（旧市民会館）が建設されたのです。

家の近所にヴァイオリンの上手な「おじさん」がいて「学生時代、伊福部昭と一緒に弾いた」と語っておられました。我が家にもヴァイオリンがありましたが、結局弾かずじまい。中学は吹奏楽部でクラリネット、高校部活はオーケストラに入るのが希望でした。しかしオーケストラのない高校へ進学してしまい、楽器の練習は一時中断。私と妹のピアノの阿部圭子先生は初代札響理事長・阿部謙夫さんご子息のお嫁さん。同居しておられました。札響はどんどん身近になって来ました。

昭和50年、札響はアメリカ・西ドイツ公演を行いました。ウイーンに住んでいた私は、列車でミュンヘンまで聴きに出かけました。宿舎のホテルへ行くと若い日本人がいて「みんな、演奏会場で練習中」とのこと。旅行社の人かと思っていましたが、「松本さんとはミュンヘンで初めて会いましたね」と10年ほど前に竹津宜男さんから伺いましたが、それが最後となってしまいました。当夜の演奏曲目はペーター・シュヴァルツ指揮でベートーヴェン「英雄」他。懐かしい札響の音に思わず胸が熱くなりました。

28歳で札幌に戻ってから暇な毎日で、しばらくヴァイオリンの荒谷正雄先生の札幌音楽院に通いましたが、多忙となり短期間で中断。転勤の後、43歳で札幌に戻ってきて今度は、オーボエ首席奏者だった岩崎弘昌先生の門を叩きました。退職後はアマチュアオーケストラ入団と思い、オーボエは狭き門なので一念発起して、元札響チェロ奏者・上原与四郎先生にも教えていただきました。

札響の演奏は全部素晴らしいですが、特に印象深かったのは合唱団で出演させてもらった演奏会。正指揮者時代の尾高忠明「ベートーヴェン・ミサ・ソレムニス」は在京のオーケストラ、小澤征爾指揮でも歌ったことがありました。

札響はどこにもひけをとらない優れたオーケストラです。指揮者も凄い方ばかりです。70歳を過ぎて演奏からは退きつつありますが、私の人生は音楽で華やかに彩られていました。

昔も今も私は札響の大ファンです。

**会員／松本良一**

私の演奏を心配そうに見守る　岩崎弘昌さん

## 「傑作の森」を聴く喜び

ベートーヴェンの音楽にぞっこん惚れ込んでいたフランスの作家ロマン・ロランは、作曲者30代前半からほぼ10年間に生みだされた作品群を「傑作の森」とよび、特に高い評価を与えていた。そこにひしめく作品群は交響曲、協奏曲、室内楽曲、器楽曲等核心的なジャンルが網羅され、誰もが知る主要な演奏会レパートリーとなっている。

そのような中でも、僕はヴァイオリン協奏曲ニ長調作品61に特別の親しみを抱いてきた。それは聴く者をアット・ホームな幸福感に導く、満ち足りた豊かな響きとロラン好みの革命性によるものであろう。

脂の乗り切った時期のベートーヴェンのオーケストラ作品の響きはなんと暖かく幸福感にあふれているのだろうか。ヴァイオリンという楽器の真価が最も現れやすいニ長調という調性にもよるのだろうが、弾力に富む音の広がりは晩年の序曲群等（例えば「命名祝日」作品115、「シュテファン王」作品117、「献堂式」作品124、「レオノーレ」第1番作品138）の、筋肉質ばかりが強調されるごつさとは雲泥の差である。

ティンパニーの連打で開始される協奏曲は当時としては異例だったと思われる（その後グリーグのピアノ協奏曲やR・シュトラウスの「ブルレスケ」の開始場面でティンパニーが活躍する手法が採られている）。時代を先取りする革命児としてのベートーヴェンの面目躍如であり、ロランの血を騒がせることになったのであろう。ティンパニーに先導された冒頭のリズムは、最初の楽章全体を通じて他の楽器にも受け渡されながら繰り返し聴く者にその意味を強調している。

豊かな音量、ほとばしる作品への共感。4月14日の札幌交響楽団新・定期演奏会（札幌文化芸術劇場）では、竹澤恭子氏のソロが恰幅のよい深々とした低音域から輪郭が明快で輝かしい高音域までをむらなく披露し、ブラームスとともにヴァイオリン協奏曲の頂点に立つこの作品の真価を高めていた。F・クライスラーによるカデンツァでも朗々たる響きが会場の隅々まで浸透していた。柔軟でフトコロの深い札響のサポートも「傑作の森」の中でも最高峰に位置するこの音楽に風格を添えていた。近来まれに見る名演だったと思われる。

当初この協奏曲はベートーヴェン自身の編曲によるピアノ版が演奏される予定だったという。コロナ・ウィルス騒動はソロ奏者の来日を不可能にし、原曲に差し替えられたのであるが、僕たちには嬉しい結果となった。いくら作曲者自身による編曲とはいってもピアノ版では原曲から得られる幸福感にはとても及ばない。それはCDでも確認済みである。ひとつの楽器の可能性を切り開くべく挑戦した、当初の思い入れがいかに高い芸術性を導くのかという真理の証しであろう（勿論逆の場合もありうるが）。

当日のもうひとつの曲目、同じニ長調が基調の、シベリウスの第2番の交響曲の爽やかさも印象的。

これだけの名曲、名演だったが故に、各楽器の音色が高度な次元で溶け合う、キタラ・ホールで聴きたかったと思うのは僕だけではないだろう。

**会員／村岡範男**

ヴァイオリン　竹澤恭子
指揮　高関　健

## チャイコのワルツ　まとめ聴き

3月19日（金）の「札響・北海道応援コンサート」、松本宗利音さんの指揮とおはなしで肩の凝らない、楽しい演奏会であった。「親子で聴くチャイコフスキー」と名づけられていて、春休みを前にした平日の昼間、どのような親子が聴きに来るのだろうかと気になっていた。会場には、期待通りの親子連れは少なく、私のような、子や孫を伴わないオールドファンが多かったようである。

私の当日の目当ては「三つのワルツ」。チャイコフスキーのワルツはどれも魅力的である。「交響曲第5番の第3楽章」「弦楽セレナーデの第2楽章」等々。この日は三大バレエのワルツが全部聴けるというのだから、行かないわけにはいかない。

カナモトホールで札響の演奏を聴くのは初めてであった。この日、札響の弦楽器群は小振りであった。それに加えてホールの響きの所為であろうか、管・打楽器がよく聞こえてきた。これが私には嬉しかった。開口一番、大太鼓とシンバルがしっかりとした存在感をもって耳に入ってきた。「序奏とリラの精」はこれで始まった。その後、「情景」のオーボエ、「ナポリ」のコルネット、「金平糖」のチェレスタとバスクラ、「中国」のファゴットとピッコロ、「あし笛」のフルートとイングリッシュホルンなどが衣服をまとわない姿で、手に取るように聞こえてきた。

そして肝心のワルツ。三曲とも心が躍るようにすばらしく、「白鳥」ではワルツが終わると拍手がわき起こった。組曲の途中ではあったが、聴衆の自然で、素直な反応であった。「花のワルツ」では冒頭のハープに魅せられた。そのあとホルン、クラリネット、フルートに引き継がれ、華やかさを増していく。踊り出したくなるような楽しさに満ち溢れた「花のワルツ」はやはり圧巻であった。

札響の若きマエストロ松本宗利音さん
（写真協力：札幌交響楽団）

「チャイコのワルツ」、私が盲目的に好きな曲たちである。

会員／村山英朗

## 「ザルツブルグ音楽祭」の思い出

私は「団塊の世代」に属しています。小学校では、一年十組でした。

オーケストラは齢をとらないけれども、指揮者はどんどん齢を重ねて、交替していきます。我々聴衆にもまた時は待ってくれないようです。

さて、私には「ザルツブルグ音楽祭」の思い出があります。一九七五年のことでした。この年はバーンスタインが初めて「ザルツブルグ音楽祭」に登場した年でした。当時のクラシック音楽の世界では、カラヤンとバーンスタインが人気、実力ともに双璧だったと思います。さらにカラヤンは「ザルツブルグ音楽祭」の総監督を務めていました。

マーラーの「千人の交響曲」を引っ提げてやって来たバーンスタインに対して、カラヤンはブルックナーの「交響曲第8番」でした。勝負曲だと思います。オーケストラも片やウィーン・フィル、片やベルリン・フィルです。

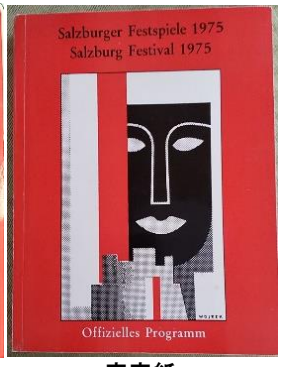
この時、バーンスタインはロンドン交響楽団とシベリウスの「交響曲第5番」を振っています。終楽章の、曲を締めくくる6発のトゥッティは圧倒的な迫力でした。

この年はズビン・メータも来ていました。イスラエル・フィルとドヴォルザークの「交響曲第7番」を演奏したのですが、弦がうなり、ボワーンと心地よく共鳴していたのが忘れられません。

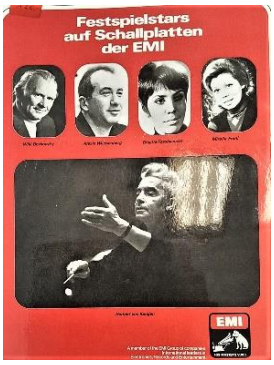
私は高校生でしたので聴いていませんが、一九六六年にはカラヤンとベルリン・フィルが旧札幌市民会館で演奏しています。一方、バーンスタインは一九九〇年の第一回ＰＭＦにおいて同ホールで、シューマンの「交響曲第2番」を演奏しました。この時、第3楽章ではヴァイオリン奏者を全員立たせて演奏していました。

そして、この3月両巨匠が振った札幌市民会館（現札幌市民ホール）で、札響のチャイコフスキー「眠りの森の美女」（抜粋）を聴きました。強靭な音にびっくりしました。札響は変わったなと思いました。

会員／西岡直樹




表表紙




裏表紙

ザルツブルグ音楽祭の公式プログラム

## スタッフの声

▼3月の札響定期の客演奏者（フィルードドラム）として、留学を終えて帰国した息子が出演した。親心で金曜、土曜と聴きに行ったが、なんだかいつもの定期演奏会とは全く違う大きな感動を覚えた。ずっと札響を応援し、「札響くらぶ」のスタッフとして活動してきただけに、オーケストラの一員として同じ舞台で息子が演奏しているのだから自然な反応なのだろう。マエストロ尾高さんとのリハ・ゲネプロと本番二日間で色々な事を感じ取って、成長してくれたと思いたい。（上野）

▼去年の事。鴛鴦（おしどり）一家を観察する機会があり、忘れ難い母鳥との出会いがあった。雛が岸に上がったところで母鳥は、杭に飛び乗り周囲をぐるりと見渡した。そこで私と目が合った。見つめ合う事しばし。それは凛とした紛れもない母の顔である。やがて警戒は解かれ、私は認められたようであった。今年も彼女に会えるだろうか。会いたい！（島田）